

12 方式の[11] 原因基 -ay-e- により新自動詞を作る (74)

Z 11 [自 aye 自] 原自動詞が aye により新自動詞に (74)

T 11 [他 aye 自] 原他動詞が aye により新自動詞に (75)

12 方式の[12] o 格以外の客体を主体化して新動詞を作る (76)

Z 12 [自○自/他] 原自動詞がある態構造により新動詞に (76)

T 12 [他○他/自] 原他動詞がある態構造により新動詞に (77)

V3.3 不規則にみえる動詞 (84)

する (84) 来る (85) 死ぬ (86) ある (87)

V3.4 いくつかの動詞 (88)

食べる (88) 触れる (89) 聞こえる・見える (90)

林氏が見える=おいでになる (91)

質問の解答例 ..... 97

V1章 (98)

V2章 (102)

V3章 (105)

あとがき (117)

本書を読んで答えられるようになったこと (118)

### コラム目次

コラムV1 形態素に分けられない……国語学の限界 (36)

コラムV2 動詞(語幹)が2段階で統一 (78)

コラムV3 係り結び

……待望の新終止形は倒置がきっかけで誕生 (80)

コラムV4 許容態の語幹化と形の統一 (82)

コラムV5 かな「語幹」が恥ずかしそう (92)

コラムV6 未然形? 仮定形? (93)

コラムV7 原因基 -(s)as;e- (94)

コラムV8 受影基 -(r)ar;e- (95)

コラムV9 古い原因基 しむ<sup>レ</sup> -(a)sim;Ø- (96)

## コラムV1

## 形態素に分けられない……国語学の限界

「形態素」とは「意味を持つ最小の言語単位」です。名詞にも動詞にも形容詞にもあります。

名詞の形態素は、たとえば、「ゆき(雪)」や「かお(顔)」などです。

動詞の形態素はローマ字で示するのが適切です。yom- (読む) や mi- (見る) など、これらは実際に使うときは -u (-ru) や、-i (-Øi) や、-oo (-yoo)などを伴い、yom-u や、mi-yoo のようにします。

yom- や mi- にも意味があるのです。でも、-u や -i、-oo にも意味はあるのでしょうか。ちょっと考えればすぐに分かります。yom-u と yom-i、yom-oo では意味が異なりますから、-u や -i、-oo にも意味はあるのです。

形容詞の形態素もローマ字表示が適切です。「赤い」という形容詞は、aka.k-i というように形態素分析できます。理由は『日本語のしくみ(3)』に書いてあります。

国語学辞典の説明するのは、名詞関係だけの形態素です。どんな国語学・日本語学辞典でも、形態素を説明しているのは名詞関係についてだけです。動詞や形容詞も、扱うのは名詞形だけで、形態素そのものについての説明はありません。

ということは、現在の国語学者は動詞や形容詞を形態素分析することはできないということです。「読みます yomimasu」を形態素に分けてください、と言っても yo-mi-masu なのか yo-mi-ma-su, yomi-masu, yom-imasu, yom-imas-u, yom-i-mas-u なのか決められないということです。甚だしい場合は、そんな分析に何の意味があるのか、と言います。(私はある研究者が論文の中で、ここにある -i を誇らしげに「無意味形態素」とよんでいるので、びっくりしました。)……形容詞「赤い」を形態素分析したとしても、中に .k- があるなどとは思いつかないでしょう。

国語文法の研究は成熟しきっていて、もう若い人が入り込む余地はないという意見もあります。ほんとうにそうでしょうか。実際は国語文法の研究は行き詰まっているのです。本書でお分かりのように、やるべきことはたくさんあるのですが、国語学ではもう限界なのです。動詞や形容詞の形態素分析ができないからです。

形態素分析ができないのは「ひらがな」で文法を考えているからです。ひらがなで文法を考えるのは、人間を考えるのに、個人を考察の対象にしないで、家を単位に考察していることに似ています。ローマ字で考えれば、yom- と -u の機能を個別に検討することができますが、ひらがなでは、「よ」と「む」に分けるか、「よむ」全体を1つの単位とするかにせざるを得ないわけです。文法要素、つまり「個人」を個別に扱うことができず、その入った「家」全体を見るしかないわけです。

問V2-18 国語文法では「読む」の仮定形は「読め」です。なぜこうなるのですか。

コラムV2

動詞(語幹)が2段階で統一

動詞(語幹)は、主要な変化である①と②では、鎌倉と江戸の2つの時代に統一への動きがありました。「かな」で考える国語学では、「活用の変化」として扱います。

表V2 動詞(語幹)の変化 (国語学でいう「活用の変化」)

	元の活用	現代語の活用	語例(現代語)	方式	参照
①	下二段活用	→ 下一段活用	開ける ak;e-	方式[2]	
②	上二段活用	→ 上一段活用	起きる ok;i-	方式[3]	
③	上一段活用	→ 上一段活用	見る mi-	方式[1]	
④	四段活用	→ 五段活用	読む yom-	方式[1]	
⑤	ラ変活用		ある ar-	方式[1]	本書p.87
⑥	ナ変活用		死ぬ sin-	方式[3]	本書p.86
⑦	下一段活用		蹴る ke;r-	方式[1]	
⑧	カ変活用	→ カ変活用	来る k;ur-	方式[3]	本書p.85
⑨	サ変活用	→ サ変活用	する s;ur-	方式[3]	本書p.84

時代的な変化なので、「時代のものさし(横)」を使うことにします(本書p.46参照)。

8c	9c	10c	11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
奈良		平安			鎌倉	室町				江戸			現代

①では、鎌倉と江戸後期の2段階で動詞(語幹)の統一が進みました。方式[2]

図V2① 奈良 平安 | 鎌倉 | 室町 | | 江戸 | 現代

開ける ak;e-	ak;∅-	(消滅)
	ak;ur-	(消滅)
	ak;ë-	ak;e- (これに統一)
	下二段活用	下一段活用

②でも、鎌倉と江戸後期の2段階で動詞(語幹)の統一が進みました。方式[3]

図V2② 奈良 平安 | 鎌倉 | 室町 | | 江戸 | 現代

起きる ok;i-	ök;∅-	ok;∅-	(消滅)
	ök;ur-	ok;ur-	(消滅)
	ök;i-	ok;i- (これに統一)	
	上二段活用	上一段活用	

問V3-38 上の①, ②での、鎌倉時代と江戸時代での変化を説明してください。

③の上一段活用には許容態が関わらず、動詞(語幹)はそのまま現代語に。方式[1]

図V2③	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
見る mi-	mi-					
	上一段活用					

④の四段活用も動詞(語幹)はそのままでしたが、江戸時代後期に描写詞に-oo が加わったので、「かな」表現で見て、「五段活用」とよばれるようになりました。

図V2④	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
読む yom-	yom-					
	四段活用				五段活用	

⑤の動詞 ar-は、終止形の描写詞が -i だったためにラ変(ラ行変格)活用とよばれました。鎌倉・室町時代に他の動詞と同じ-u になりました。本書p.87参照

図V2⑤	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
ある ar-	ar-					
	終止形描写詞 -i (ラ変活用)			終止形描写詞 -u (四段・五段活用)		

⑥の動詞 sin-は、sin;ur-という形が江戸時代後期に消えました。本書p.86参照

図V2⑥	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
死ぬ sin-	sin;ur-					(消滅)
	sin-					(これに統一)
	ナ変(ナ行変格)活用				五段活用	

⑦の動詞 ker-は古語唯一の e 末動詞でしたが、r を取り込み子音末になりました。

図V2⑦	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
蹴る ke;r-	(kwe-)	ke-			ke;r-	
	(唯一の)下一段活用				五段活用	

⑧⑨の動詞 k;ur-, s;ur- は動詞(語幹)形式が統一されていません。本書pp.84-85参照

図V2⑧	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	現代
来る k;ur- する s;ur-	k- / s-					
	k;ur- / s;ur-					
	ko- / si-					
	カ変(カ行変格)活用 / サ変(サ行変格)活用					

問V3-39 四段活用が五段活用になったのは動詞(語幹)が変化したからですか。

## コラムV3

## 係り結び……待望の新終止形は倒置がきっかけで誕生

「係り結び」とは文を作るときに起こった法則的現象で、平安時代を中心に存在しました。次のように、3種類に整理されていますが、①②は特に「係り結び」とよぶ必要のないものです。国語学者の大野晋氏の考え方を参考に述べます。

①係りが「ハ、モ」のときは、結びは特に定めなし。(多くは終止形。)

花<sub>01</sub> 咲く sak-u。 水<sub>01</sub> 流る nagar-u。(現代語 nagar;e-ru)

花<sub>01</sub>ハ咲く sak-u。 水<sub>01</sub>ハ流る nagar-u。

花<sub>01</sub>モ咲く sak-u。 水<sub>01</sub>モ流る nagar-u。

→ ハ、モは「とりたて」をしているだけで、現代語でも同じです。

②係りが「コソ」のときは、結びは已然形。

花<sub>01</sub> 咲け sak-e, ……。 水<sub>01</sub> 流るれ nagar;ur-e, ……。

花<sub>01</sub>コソ咲け sak-e, ……。 水<sub>01</sub>コソ流るれ nagar;ur-e, ……。

(花は咲くけれど, ……。) (水は流れるけど, ……。)

→ 「已然形」は奈良時代に順接・逆接を表していて、逆接の文にコソが入りました。つまり、もともと已然形があったところにコソが入ったわけで、コソが已然形を要求していたわけではありません。ということは、この①②は特に「係り結び」とよぶ必要のないものです。

「係り結び」の現象は、次の③の、特にゾとカの倒置現象に由来します。

③係りが「ゾ、ナム、ヤ、カ」のときは、結びは連体形。

◎花<sub>01</sub>ゾ 咲く sak-u。 水<sub>01</sub>ゾ 流るる nagar;ur-u。

花<sub>01</sub>ナム 咲く sak-u。 水<sub>01</sub>ナム 流るる nagar;ur-u。

花<sub>01</sub>ヤ 咲く sak-u。 水<sub>01</sub>ヤ 流るる nagar;ur-u。

◎花<sub>01</sub>カ 咲く sak-u。 水<sub>01</sub>カ 流るる nagar;ur-u。

ゾ(ソ)の使用された文はふつうはこうでした。(主部－述部)

あきづ島大和の国は うまし国ソ (ソ……「である」の意味)

これが、主部の強調のために倒置されて、こうなりました。

うまし国ソ あきづ島大和の国は (万葉2)

このような倒置のために、主部の体言(名詞…大和の国)が文末に来ることになりました。次のような場合には、主部の体言(名詞)相当の連体形(寝にける)が文末に来ることになりました。

春の野にすみれ摘みにと来し我ソ 野をなつかしみ<sup>ひとよ</sup>夜寝にける (万葉1424)

(すみれを摘みに来た私だ。野が去りがたくて一晩寝てしまった(人)は。)

これと同じ、文末に体言相当の連体形が来ることは、カについても言えます。

照るべき月を 白たへの雲カ 隠せる (万葉1079)

(白い布のような雲だろうか。照るはずの月を隠している〈もの〉は。)

これは、「(月を)隠せる(もの)は 白たへの雲カ」の倒置として理解できます。

このように、倒置により、ゾ(ソ)とカの場合に、文末に連体形が置かれることになりました。これがきっかけとなって、倒置の機能がなかった、ナム、ヤもこれに従うようになりました。こうして、文を連体形で終止することが一般的となりました。まさに「係り結び」です。……しかし、その後、倒置の表現効果は徐々に消滅しました。

以上は大野氏の考え方です。この後は、自分で考えることとなります。

前提として、次の〈1〉と〈2〉の2つのことを認識しておく必要があります。

〈1〉平安時代は許容態の語幹化した動詞は「終止形」が古いままでした。(方式[2]参照)

連用形などは、自動詞と他動詞が形で区別できるようになっていましたが、終止形はまだでした。それで、区別できるようになる機会をうかがっていました。

表コV3-1 平安時代の許容態語幹化動詞の終止形は古いまま(例:「砕く」)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
他動詞	砕き kudak-i	砕く kudak-u	砕く kudak-u	砕け kudak-e	砕け kudak-e
自動詞 (許容態形)	砕け kudak;e-Ø	砕く kudak;Ø-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;e-yo

表コV3-2 終止形は自他同形のまま(例:自動詞「立つ」、他動詞「砕く」)

自動詞	他動詞(許容態形)	他動詞	自動詞(許容態形)
波が立つ tat-u	波を立つ tat;Ø-u (「立てる」のつもり)	岩が波を砕く kudak-u	波が岩に砕く kudak;Ø-u (「砕ける」のつもり)

〈2〉日本語の子音末動詞では終止形(yom-u)と連体形(yom-u)が同形です。

許容態により新しくできた動詞は終止形(kudak;Ø-u)と連体形(kudak;ur-u)が異なる形でした。同じ形にしたかったのですが、きっかけがありませんでした。

この〈1〉〈2〉の状況下で、ゾとカの倒置用法から文末を連体形で終止することが始まりました。これは動詞にとってまたとないよい機会となったわけで、待望していた、連体形の形を新しい終止形(Ø →;ur)とすることができるようになったのです。

表コV3-3 鎌倉時代の自動詞「砕くる」……終止形を連体形と同形にできた

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞 (許容態形)	砕け kudak;e-Ø	砕くる kudak;ur-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;e-yo

問V3-40 「係り結び」といわれる現象のおかげで何が実現したのですか。

## コラムV4

## 許容態の語幹化と形の統一 [T2]を例に

## [許容態の語幹化] 推定

動詞の許容態拡張は段階的で、まず、態に敏感な、従属節の述語となる連用形に ;ë- という形で始まりました(本書pp.40-41)。連用形は命令形にも使われました。

表コV4-1 許容態の発生 語幹2種類 xxx;ë-(砕け), xxx-(砕く)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞形 (語幹2種類)	砕け kudak;ë-Ø	砕く kudak-u	砕く kudak-u	砕け kudak-e	砕けよ kudak;ë-yo
	自動詞形	まだ自他同形			自動詞形

次に、かなり時間をおいて、やはり従属節を形成して態に敏感な、連体形と已然形に ;ur- という形で起こりました(本書p.41)。

表コV4-2 許容態の進展 語幹3種類 xxx;ë-(砕け), xxx-(砕く), xxx;ur-(砕くる)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞形 (語幹3種類)	砕け kudak;ë-Ø	砕く kudak-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;ë-yo
	自動詞形	まだ自他同形	自動詞形		

奈良時代はこの状況が続いているときに始まりました。ëは平安時代に e に。

## [許容態の完全語幹化] 鎌倉時代

鎌倉時代になってやっと、態には最も鈍感でよかった主文の述語である終止形が、係り結び現象をきっかけに、連体形と同じ;ur-の形を取るようになりました。

表コV4-3 許容態の完全語幹化 語幹2種類 xxx(砕け), xxx;ur-(砕くる)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞形 (語幹2種類)	砕け kudak;e-Ø	砕くる kudak;ur-u	砕くる kudak;ur-u	砕くれ kudak;ur-e	砕けよ kudak;e-yo
	自動詞形が2種類に ( xxx;e- と xxx;ur- )				

## [許容態の形の統一] 江戸時代・後期

江戸時代・後期に、許容態 ;ur- は短い形の ;e- に統一されました。

表コV4-4 許容態の統一 語幹1種類 xxx;e-(砕け)

	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
自動詞形 (語幹統一)	砕け kudak;e-Ø	砕ける kudak;e-ru	砕ける kudak;e-ru	(なし)	砕けろ kudak;e-ro
	自動詞形が1種類に ( xxx;e- ) (母音末動詞になる)				

問V3-41 このページに示された「変化」を簡単な表にすることができますか。

## コラムV5

## かな「語幹」が恥ずかしそう

「語幹」は「活用語で変化しない部分」のことで、「意味を担う部分」です。しかし、国語文法の「かな」で表記する語幹は、意味を担えないので、語幹で動詞を区別することができません。たとえば、語幹が「た」の動詞は少なくとも8つあります。

表V5-1 国語文法で「た」を語幹とする動詞

	動詞	かな表記	かな語幹	ローマ字表記	ローマ字語幹	
五段活用動詞	炊く	たく	た	tak-u	<b>tak-</b>	子音末動詞
	足す	たす	た	tas-u	<b>tas-</b>	
	立つ	たつ	た	tat-u	<b>tat-</b>	
一段活用動詞	絶える	たえる	た	tae-ru	<b>tae-</b>	母音末動詞
	建てる	たてる	た	tate-ru	<b>tate-</b>	
	貯める	ためる	た	tame-ru	<b>tame-</b>	
	足りる	たりる	た	tari-ru	<b>tari-</b>	
	食べる	たべる	た	tabe-ru	<b>tabe-</b>	

そんなばかな、と思う人も多いでしょう。でも活用表ではそうなっています。

表V5-2 国語文法の動詞活用表（上表8動詞のうちの4動詞を例とします。）

基本形	語幹	活用語尾					
		未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
炊く	た	か/こ	き/い	く	く	け	け
立つ	た	た/と	ち/っ	っ	っ	て	て
足りる	た	り	り	りる	りる	りれ	りろ
食べる	た	べ	べ	べる	べる	べれ	べろ

一方、ローマ字語幹なら、語幹が意味を担えるので、語幹で動詞が特定できます。

表V5-3 本文法の動詞活用表の関連部分（活用表全体は本書p.42参照）

動詞(基本形)	語幹(動詞)	未然形	連用形	終止形	連体形	条件形	命令形
炊く	<b>tak-</b>	-	tak-i	tak-u	tak-u	tak-eba	tak-e
立つ	<b>tat-</b>	-	tat-i	tat-u	tat-u	tat-eba	tat-e
足りる	<b>tari-</b>	-	tari-Ø	tari-ru	tari-ru	tari-reba	tari-ro
食べる	<b>tabe-</b>	-	tabe-Ø	tabe-ru	tabe-ru	tabe-reba	tabe-ro

国語文法では、動詞を音声表記にせず、かな表記にして、かなの不変部分が「語幹」であると勘違いしたままです。本当に情けないです。かな「語幹」が恥ずかしそうです。

問V3-52 国語文法の「かな語幹」、たとえば「か」で、動詞が特定できますか。

問V3-53 kas-, kat-, kari-, kare- などの語幹で動詞を特定できますか。



## コラムV6

## 未然形？ 仮定形？

①「のむ」と聞いたときに、意味が分からないという人はいないでしょう。②「のみ」でも、まあ、分かります。③「のめ」は、はっきり分かります。①は動詞「飲む」の終止形、連体形です。②は連用形、③は命令形です。

表V6-1 国語文法の動詞活用表

基本形	語幹	活用語尾					
		未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の	④ ま／も	② み／ん	① む	① む	⑨ め	③ め

では、④「のま」「のも」と聞いて、これが何か未来のことを表していると思う人がいるでしょうか。国語文法では「のま」「のも」は未然形(まだそうになっていないことを表す形)といわれています。これを未然というのであれば、「のむ」「のめ」でさえ未然であるのではないですか。みんな未然形ということになってしまいます。

実は「のま」は、⑤「のまない」、⑥「のます」、⑦「のまれる」の頭の部分(下線部)で、「のも」は、⑧「のまう」の頭の部分です。本文法では下線部だけでなく、「」内全体が、⑤否定形、⑥原因形(使役形)、⑦受影形(受身形)、⑧意志・推量形です。

「未然形」というとき、上述のように、問題が2つあります。(1)「のま」「のも」という意味不明の形式に、(2)「未然形」という不適切な名称を与えていることです。

もうひとつ、同じ問題があります。⑨「のめ」といわれたときには、だれでも命令されていると理解します。これが仮定を表しているとは夢にも思いません。仮定を表すなら、「のめば」でしょう。しかし、「のめ」だけを「仮定形」とよんでいます。「仮定形」というなら、「のめば」ではありませんか。

国語文法ではひらがなを使って活用表を作りますので、かなの表す(〈子音+〉母音という)「拍」が単位となり、かなの配列の体裁が重視されます。つまり、動詞の活用表とはいっても、動詞の機能を整理することが目的にはなりません。

驚くべきことは、敢えて言いますが、国語学者のうちの言語学の素養のあるはずの人でさえこの国語文法の活用表に従ってきたことです。そして、日本人全体もこの活用表に疑いを持ちませんでした。日本人は集団錯誤の中にいたようです。……かなの呪縛は相当なものでした。

では、どのような活用表にすればよいのでしょうか。それは本書のp.42を見ればお分かりいただけるものと思います。

問V3-54 国語文法では、「飲む」の連用形の枠の中になぜ「ん」があるのですか。

問V3-55 五段活用動詞・連用形の枠内に2とおりの表示がない動詞は何ですか。

## コラムV7

## 原因基 -(s)as;e-

-(s)as;e- は、複合原因態として機能する原因基（国語文法の助動詞）です。動詞に付いて「直接他動・指示他動・結果将来・不阻止」の意味を与えます(S3.3参照)。歴史的には次表のように推移しました。

表V7-1 -(s)as;Ø- の変遷

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
3形	奈良時代	-as;e-Ø	-as;Ø-u	-as;ur-u	-as;ur-e	-as;e-yö
	平安時代	-(s)as;e-Ø	-(s)as;Ø-u	-(s)as;ur-u	-(s)as;ur-e	-(s)as;e-yo
	鎌倉時代					
2形	室町時代		-(s)as;ur-u			
	江戸・前期					
1形	江戸・後期					-(s)as;e-ro
	現代	-(s)as;e-Ø	-(s)as;e-ru	-(s)as;e-ru		

上表で、平安時代に (s) が出現したことが分かります。このことは、動詞の態拡張によって、「育てる sodat;e-」や「下りる ori;i-」のように、eかiが動詞(語幹)末にくる、母音末動詞が出現したことを物語っています。

★ところで、江戸前期には、下表のように、許容態(;e-, ;ur-)の省略された形が出現しました。

表V7-2 -(s)as- の出現

許容態(;e-, ;ur-)の省略

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
1形	江戸・前期					
	江戸・後期	-(s)as-i	-(s)as-u	-(s)as-u		
	現代					

使用例は以下のとおりです。

連用形 yom-as-i 読まして) tabe-sas-i 食べさして)

終止形 yom-as-u 読ます。 tabe-sas-u 食べさす。

連体形 yom-as-u 読ます(人) tabe-sas-u 食べさす(人)

これはどちらかという、非正規的な形として認識されています。やはり、許容態 ;e- の省略されない原因基 -(s)as;e- のほうが正規のものと感じられます。

連用形 yom-as;e-Ø 読ませ(て) tabe-sas;e-Ø 食べさせ(て)

終止形 yom-as;e-ru 読ませる。 tabe-sas;e-ru 食べさせる。

連体形 yom-as;e-ru 読ませる(人) tabe-sas;e-ru 食べさせる(人)

コラムV8

受影基 -(r)ar;e-

-(r)ar;e- は、複合受影態として機能する受影基（国語文法の助動詞）です。動詞に付いて「受影・自発・可能・尊敬」の意味を与えます(S3.4参照)。

表V8-1 -(r)ar;Ø- の変遷

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
3形	奈良時代	-ar;e-Ø	-ar;Ø-u	-ar;ur-u	(-ar;ur-e)	
	平安時代	-(r)ar;e-Ø	-(r)ar;Ø-u	-(r)ar;ur-u	-(r)ar;ur-e	-(r)ar;e-yo
	鎌倉時代					
2形	室町時代		-(r)ar;ur-u			
	江戸・前期					
1形	江戸・後期					-(r)ar;e-ro
	現代	-(r)ar;e-Ø	-(r)ar;e-ru	-(r)ar;e-ru		

奈良時代は「尊敬」用法がなく、「受影、自発、可能」用法だけでした。

平安時代から室町時代までは、命令形は「尊敬」用法の場合のみに使われました。

平安時代に (r) が出現しました。このことは、動詞の態拡張により、「捨てる sut;e-」や「閉じる tod;i-」のように、e か i が動詞(語幹)末にくる母音末動詞が出現したことを物語っています。

捨てられる sut;e-rar;e-ru

閉じられる tod;i-rar;e-ru

★奈良時代には -ay;Ø- という受身・自発・可能の形式がありました。「ゆ」です。

表V8-2 奈良時代の -ay;Ø-

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
3形	奈良時代	-ay;ë-Ø	-ay;Ø-u	-ay;ur-u	-ay;ur-e	

・これが語幹化した動詞については形式[11](本書pp.74-75)を参照。

[受身] 「人にいとほえ itoh-ay;ë-Ø」 〈人にいやがられ〉

[自発] 「音のみしなかゆ nak-ay;Ø-u」 〈声をたてて泣いてしまう〉

[可能] 「わすらえぬ wasur-ay;ë-nu かも」 〈忘れることはできないことよ〉

問V3-56 現代語の「取られる」は、奈良時代、室町時代にはどう言いましたか。

問V3-57 学校で助動詞「れる・られる」と習いますが、これは別のものですか。

問V3-58 国語文法では -ay;Ø-u のことをなぜ「ゆ」というのでしょうか。

## コラムV9

## 古い原因基 しむ -(a)sim;Ø-

古語には「取らしむ tor-asim;Ø-u」「得しむ e-sim;Ø-u」のように「しむ -(a)sim;Ø-」という態形式(基)がありました。「さす -(s)as-」と同様、原因態を表示するもので、主として使役を表しました。

この「しむ -(a)sim;Ø-」の歴史的推移は下表のとおりです。

表コV9 -(a)sim;Ø- の推移

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
3 形	奈良時代	-(a)sim;ë-Ø	-(a)sim;Ø-u	-(a)sim;ur-u	( -(a)sim;ur-e )	-(a)sim;ë-Ø
	平安時代	-(a)sim;e-Ø			-(a)sim;ur-e	-(a)sim;e-yo
2 形	鎌倉時代		-(a)sim;ur-u			
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
	現代	-(a)sim;e-Ø	-(a)sim;e-ru	-(a)sim;e-ru		-(a)sim;e-yo

※上表のように、奈良時代には許容態に3つの形式がありました。

連用形、命令形では ;ë- で、 (tor-asim;ë-Ø 取らしめ)  
 終止形では ;Ø- で、 (tor-asim;Ø-u 取らしむ)  
 連体形、已然形では ;ur- でした。 (tor-asim;ur-u 取らしむる)  
 (tor-asim;ur-e 取らしむれ)

※はじめは、許容態詞が付かず、原因態詞のみの -(a)sim- であったと考えられます。(奈良時代よりかなり前です。)

※ -(a)sim- は、研究が進めば、-as-im- のように分析できるようになる可能性もあります。

この原因態形式(基)は、平安時代には主として漢文訓読系の文献に用いられ、室町時代よりあとは文章語としてのみ使用され、特に近世以降は会話ではまったく用いられなくなりました。同じ機能を持つ、より短い許容態詞 -(s)as- があったので、必要がなくなったものと考えられます。

上の表の〔現代〕の部分に白抜き文字で示したのは、現代において擬古文的に使われた場合の形です。

問V3-59 動詞「いましめる」の中に -(a)sim;Ø- はありますか。

問V3-60 「くるしめる」は「いましめる」の構造と同じですか。